

## ローマ8章1-13節「内に住んでおられる御霊」

### 1A 御霊に導かれる者 1-11

1B 理由 - 肉における処罰 1-4

2B 方法 - キリストの内住 5-11

1C 思いの中で 5-10

2C 霊のいのち 9-11

### 2A 適用:御霊による肉の死 12-13

ローマ人への手紙8章を開いてください。今日は、8章の前半部分1節から17節までを学びたいと思います。ここでのテーマは、「内に住んでおられる御霊」です。聖霊が、私たちのうちに住んでおられます。

### 1A 御霊に導かれる者 1-11

それではさっそく、1節を読みましょう。

### 1B 理由 - 肉における処罰 1-4

1 こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

パウロは、8章を、「こういうわけで」という言葉で始めています。つまり、話しは7章から続いています。7章においてパウロは、律法は正しいものであり、良いものであり、霊的なものであることを認めました。そこで、これを行ないたいと願うのですが、むしろ自分は、まったく逆のことを行なっていることに気づきます。それで、彼は、「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」と嘆いたのです。

これは私たちクリスチャンなら、だれもが経験していることです。自分が望んでいることを行なわず、むしろ憎んでいることを行なっているのが、ほんとうに救われているのだろうか、と悩むことがあります。けれども、決してそのようなことはないのです。パウロは、「今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」と言っています。主は、こう言われました。「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。(ヨハネ 3:17)」私たちが、キリスト・イエスにあって決して神に罰せられることはない、という確信によって、私たちは、からだの行ないから解放される一歩を踏むことができます。

2 なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

罪と死の原理とは、パウロが7章において分析した原理であります。自分のからだに異なる原理があり、それによって自分が憎んでいることを行なっているという原理です。キリスト・イエスにあって、私たちは、この原理から解放された、とパウロは話しています。パウロは6章において、「聖潔(holiness)に進みなさい。」と命じていました。神が聖いように、私たちも聖くならなければいけない、という命令です。そこで私たちは、自分をきよめようと努めるのですが、7章でパウロが告白したように、汚れたことを行なっている自分を発見します。

けれども、パウロは、まったく新しい異なる原理が私たちに与えられたことを紹介しています。「いのちの御霊」の原理です。神の御霊が私たちのうちで生きておられることによって、からだの行ないを殺すことができます。これはちょうど、重力の法則と空気力学の法則のようなものであります。私たちは、自分の力によっては、どのようにもがいても空に舞いあがることはできません。それは重力の法則が働いているからであり、私たちは地面に引き付けられてしまいます。しかし、この世界には異なる法則が働いており、それが空気力学の法則です。ある条件を満たすと、重力の法則に打ち勝ち、何百人もの乗客を乗せている鉄のかたまりが、空に舞いあがることのできるのです。罪に対して死に、いのちにある新しい歩みをするのができるのは、いのちの御霊が私たちのうちに生きておられるからです。

3 肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。

ここで大切なのは、律法について、神がみなそれを行なったださったという事実です。私たちではなく、神が行なってくださいました。したがって、7章においては、自分で律法を行なおうとしていたところに誤りがあったのです。すでにキリストが、律法が命じることをすべて行なってくださいました。その命令とは、正しい行ないだけではありません。律法に違反した者は死ななければいけないのですが、それも主は、私たちに代わって行なったださったのです。私たちは、このからだに罪を宿していることを見出すのですが、その罪に対する処罰は、肉のかたちを取って来られたキリストが代わりに受けてくださいました。

4 それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。

注意して読んでください、律法の要求は、私たちによって全うされたのではなく、私たちの「中で」全うされたと書かれています。律法の要求を全うして下さったキリストが私たちの中におられるからです。このことによって、私たちは、「御霊に従って歩む者」に変えられます。

預言者エレミヤは、新しい契約がイスラエルの民に与えられることを預言しました。エレミヤ書 31 章です。「わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。(31:33)」古い契約においては、文字として書かれていた律法を、自分が守ることにが義務となっていました。けれども、新しい契約においては、その律法が私たちの心に置かれて、心に書きしるされるのです。これは、キリストの御霊が私たちのうちに住んでくださるからです。キリストは律法が要求するところをみな行なわれました。そのキリストが生きてくださっているのです、私たちの中で律法が書き記されています。

私たちは、キリストにつく者、キリストの結びつけられた者となりました。アダムが罪人のかしらであったように、キリストが私たちのかしらとされました。そのため、キリストが行なわれたことが、私たちにそのまま影響し、私たちはキリストの恩恵にあずかります。キリストが死なれたときに、私たちが罪に対して死にました。キリストがよみがえられたときに、私たちにも新しいいのちが与えられました。このように、私たちはもはや、自分の行ないで神に喜ばれようとするのではなく、キリストとの結びつきを確かにしていくことによって生きていきます。自分の行為ではなく、イエス・キリストとの交わりによって生きています。行ないではなく、キリストを信じる信仰にかたく立つときに、御霊に従って歩むことができるようになります。

## 2B 方法 - キリストの内住 5-11

### 1C 思いの中で 5-9

5 肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。

パウロは、肉に従う者と、御霊に従う者とを比べていますが、「考える」ということによって比べています。言いかえると、「思い」の中で違いがあるようです。肉に従う者は、思いの中で肉的なことを考え、御霊に従う者は、思いの中で神についてのことを抱えています。

私たち人間は三つの部分に構成されています。霊と魂と体です。「思い」というのは「魂」の部分の領域です。「思い」は、私たちが霊によって支配されているにしても、肉によって支配されているにして、その影響力を持っている方に対して反応します。肉体の欲求は、空気を吸うこと、水への欲求、性欲、食欲などいろいろあります。それ自体は悪いものではなく、むしろ神に支配されているなかで、神の栄光のために用いることのできるものです。

しかしアダムによって罪と死が世界に入ってから、肉の欲求が私たちに支配するようになりました。過度の欲求を聖書では「情欲」と呼びます。神が与えておられる境界線を越えて欲求を満たすことです。例えば、夫婦の中の性欲は祝福されますが、それ以外の関係での性欲は情欲です。

したがって、生まれながらの人はもっぱら、肉体の欲求のことだけを考えます。食べること、着ること、住むこと等、目に見えることだけに関心があります。

けれども、御霊によって生まれると、霊が自分を支配します。そのため、思いもそれに反応して、神を考えるようになります。神の正義について、神の平和について、御霊に属することを思うようになります。

6 肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。

肉の思いが「死」というのは、意識が神から離れていること、霊的な死を意味します。人が死を迎えた時、同じ肉体でもその人はその人でなくなったことを私たちはよく知っています。その人に語りかけることはもはやできません。魂が離れたことを如実に物語っています。けれども、もし私たちが神について無頓着であれば、私たちの肉体は生きているけれども死んでいるのです。そして自分の肉体が死に、死後に神の裁きにあつて、永遠の断絶を味わう、つまり永遠の死を迎えます。

そして、御霊による思いとは「いのちと平安」です。神との交わりの中に命があります。神の御霊と人の霊がつながります。そしてそこには平安があるのです。次をご覧ください。

7 というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。8 肉にある者は神を喜ばせることができません。

肉にある時には争いしかありません。神に対する反抗しかありません。けれども、御霊によれば神との間に平和があり、そして神の与えてくださる平安があります。そしてここで私たちの肉は、完全に無能になっていることが、ここからお分かりになると思います。肉はもともと神に反抗して、神の律法に服従しないものなのです。肉によって神を喜ばせることは、到底できません。だから、パウロは、7章において、まったく自分では何もできないことを告白していたのです。

肉がこのような性質であることを知るべきでしょう。自分の肉は改良することができないのです。アダムから受け継いでいる罪を宿し、罪と死の原理が働いているのです。これによって神に服従は決してできないのです。そして次に、福音が書いてあります。

#### 2C 霊のいのち 9-11

9 けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。

ここには、はっきりとキリストを信じる者に御霊の約束をしてくださっています。だれでもキリストを自分の救い主として受け入れ、この方を主とあがめているなら、御霊が内に住んでいてくださっています。「神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として、御霊を私たちの心に与えてくださいました。(2コリント 1:22)」そして、私たちの内に御霊が住んでおられれば、今度は私たちが「御霊の中に」いることとなります。御霊が私たちの内におられるならば、御霊は私たちの弱さを助ける方という、補助的な部分が強調されていますが、私たちが御霊の中になると、それは御霊が私たちを導き、支配するという主導的な部分を担っておられます。

そして、「キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。」という言葉も大事です。一つに、御霊はキリストご自身と同質であるということです。御霊がおられるということは、キリストが内におられるということと同じです。もうひとりの助け主とイエス様は聖霊と呼ばれました。ご自身と同じ種類の、同じ性質の助け主ということです。そして、御霊によってのみ、その人はキリストのもの、クリスチャンになれます。神の救いは完全に、御霊の働きです。「テトス 3:4-6 しかし、私たちの救い主なる神のいつくしみと人への愛とが現われたとき、神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちに救ってくださいました。神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。」

10 もしキリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。

私たちは救われた者ですが、まだ救われていないものがあります。それは、このからだです。私たちの霊は贖われましたが、からだは贖われるのは将来に起こります。けれども、霊は生きているのです。生まれながらの人は霊が死んでいるので、肉に従って生きるしかありません。けれども、私たちの霊は生きているので、肉の欲望に逆らって、それに対抗して生きることができるようになったのです。霊は生きているけれども、体は罪の性質を宿して死んでしまっているのです。ですから、この体をどのようにすればよいか？という問題が出てきて、それで6章では、「死者の中から生かされた者として、あなたがたと自身とその手足を義の器として神にささげなさい。(13 節)」とあるのです。

11 もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。

肉の欲求よりも、御霊の力が勝っていることを示しています。肉において罪の処罰を受けてくだ

さったイエス様を、父なる神は肉体をもってよみがえらせてくださいました。したがって、御霊は、肉体の欲求がどんなに強くとも、それを乗り越えて命を与えることのできる力を与えてくださいます。したがって、からだは死んでいます。けれども、そのからだは肉の欲望のままに用いられていくことのないよう、その力を与えてくださるのです。

## **2A 適用:御霊による肉の死 12-13**

そして次に適用が始まります。

12 ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません。

私たちが与えられている自由は、「肉に従って歩まなくてよい」自由です。肉の欲求はあるのです。それからの自由は将来に約束されていますが、今はそうではありません。けれども、自分に肉の欲求があるから、「それに従わざるをえない。どうしようもできないのだ。」という奴隷状態ではないのだよ、ということです。罪を犯さなくてもよい自由が与えられました。

13 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。

パウロが、「殺す」という言葉を使っているのが大事です。私たちのからだの行ないは、改善させることはできません。殺すしかないのです。ヨシュアたちが約束の土地を自分たちの所有にするときに、カナン人たちとの共存ではなく、ことごとく殺さなければいけなかったように、私たちの肉も殺さなければいけません。ここが、私たちが弱い部分でしょう。どこかで妥協しようと思うのです。そこまで強硬策に出なくてもよい、上手にやりくりして、仲良くしなければいけないと思います。しかし、信仰生活、御霊による生活は、相手を殺すか自分が殺されるかという厳しい戦いなのです。旧約時代から新約の終わり、黙示録に至るまでなぜ戦いが多く書かれているのか？それは、私たちが御霊によって生きることは、すなわち体を殺すことに他ならない、ということ示しています。

そして、それは御霊によって殺します。私たちは、自分自身によって、肉の行ないをやめることは決してできません。自分自身が肉だからです。自分の頭の髪の毛をひっぱって、空中に上がろうとしているようなものです。そうではなく、神の御霊に自分を従わせることによって、自分の意志を神にゆだねることによって、御霊の促しに自分がそのまま合わせていくことによって、これまでできなかった罪の克服をすることができるようになります。

ある牧師さんがこう言いました。「といっても現実は違うからね。」これこそが、敵から来た考えであると。そうです、御霊によって肉の行ないは殺せるのです。